



星の降る喫茶店



都会者

筑駒電子書籍文庫

「そろそろ証拠をあげてくれないと困るよ。物的証拠さえあれば逮捕できるんだから。」というアホ上司の言葉。自分では何もやらないくせに、部下が成果をあげれば、ふんぞり返って、さも「自分がやりました」みたいな顔して、記者たちの前に出ていくようなアホ上司。朝っぱらから嫌なこと思い出してしまった。困ってるのはこっちの方なのに。「放火の証拠をあげるのが難しいことくらいあんたもわかってんだろ」って言えたらどんなに楽だろうか。

犯行現場近くの防犯カメラの映像には、火をつけたと思われる時刻に現場から走り去る人影も写っていた。ただ火を放ったところが写っているわけではないから、物的証拠がない限りなかなか逮捕にはこぎつけないのも確かだ。放火の発見が遅れると証拠が燃え尽きてしまう場合がほとんど。放火場所に何か規則でもあれば対策でもなんでも立てられるだろうが、なかなか尻尾をつかませてくれないのだ。

なるべく発見を早くして迅速に消火すれば証拠は残るかもしれないが、放火場所を事前に予測するなんてほぼ不可能だろう。かといって住民の協力を得ようとするればより警戒されてしまうかもしれない。

そこで今更ながら一つの疑問に至った。

「そもそも放火の目的はなんだ？」

愉快犯？愉快犯なら犯行後現場に戻ってくるはず。消火中の映像は何度も確認したけどそんな奴は見当たらなかった。空き巣の証拠隠滅？いや、そんなことしたら余計目立つだけじゃないか。でもこれが空き巣事件なら俺の課の山じゃなくなるかもしれない。そしたら少なくとも俺だけの責任じゃなくなる。そんなことを考えていたら、なんだか自分の情けなさに悲しくなってきた。こんな所で考えていたところで何も始まらないと気づき、現場でも見に行くことにした。

最近、あわただしくてイライラしていたせいか、空の美しさに癒されることがよくある。どんなに車通りの多いところだって、どれだけ人がひしめき合っているところだって、雲だけはいつもゆっくり流れている。雲を見ているときだけは、日ごろのストレスや不安を忘れていられる。

七月に入って、より一層強さを増した日差しを浴びて一つ伸びをした。ほんの一瞬だけれども、事件のことも、上司のことも、すべてのストレスを忘れられた気がした。

そんなことを考えながら空を見ていると、赤い何かが風に吹かれて飛んでいるのが目に入った。

「なんだあれ。」

なんだかわくわくしている自分に気付いた。普段の俺ならきっとなんとも思わないだろう。きっとただのゴミにしか見えないはずだ。でも今はなぜだか、その赤い何かが気になって仕方がない。気付いたら、その何かを追いかけようと身体が動き出していた。現場に向かっていることになって、すっかり忘れてしまっていた。冷静に考えれば、もうすぐ四十になろうという大人が、空中に浮遊する何かを追いかけまわすというのは、なかなか異常な光景だろう。しかし今はそんなことさえ気にならなかった。

駅の方へ近づくとつれて人通りも車の数も増えてきた。走るペースはどんどん落ちて行くのに、赤い何かは夏の風に吹かれてどんどんと先に行ってしまう。無我夢中になって、人ごみをかき分けていく。周りの人の視線など、今はまったく気にならない。どんどん遠ざかっていくそれに、ちょっと待って、と心の中で叫んだ。そんな声は届くはずもなく、それは離れていく。

「おい、危ねえだろ。」

というトラックの運転手の声で我に返った。目の前を何台もの車が通り過ぎていく。空を見上げるともうそれはいなくなっていた。

「大丈夫ですか？」

信号待ちをしているおばあさんが声をかけてくれた。周りからも心配なのか軽蔑なのかはわからないが、いくつもの視線を感じる。「どうかしてるんじゃないか。」後ろからそう聞こえて、それが軽蔑の視線なのだと分かった。

確かに、どうかしていたなと思う。きっと心が弱っていたんだと思う。何かいいことあればいいな、とかそんな淡い期待を抱いていたんだろう。そこでふと思った。もしかしたらあんなもの、最初から存在すらしなかったのかもしれない。

そんなことを考えていたら、急に笑いが込み上げてきた。こんなところで笑い出したら、それこそ間違いになってしまう。必死に笑いをこらえて、精いっぱい愛想のよい笑顔で、

「大丈夫です。ありがとうございます。」

そう一言言い残して、現場に向かって歩き出した。

最寄り駅から電車に乗って、二つ目の駅で降りた。そこは俺の住んでいる街とは違って、人も車も多く、高いビルが立ち並んでいた。ビルの間を抜けて、高台にある一回目の放火現場へと向かう。

考えてみれば当然のことかもしれないが、一回目の放火現場はすでに建設業者が新たに工事を始めていた。もう数か月も経っているのだから、鑑識の調査はもちろん、保険会社の調査も終わっているだろう。

急に疲れがどっと押し寄せてきた。久しぶりにこんなに走ったということもあるが、それがすべて無駄足だったとは、精神的なダメージが大きい。もう二つ目の現場行く気にもなれないな。こんなことならずっと家にこもっていればよかった。

「何かいいこと起こらないかな。」

と自分でも情けなくなるようなことを言いながら駅へと向かう階段を下りていると、赤い何かが頭上を飛んで行った。

さすがに驚きを隠せなかった。こんな偶然があっていいものだろうか、自分の目を疑った。これを追いかけたところで何か特別なことが起こるといってもいいわけでもないことくらいわかっていた。それでもなぜか追いかけてはいられない。

「何かいいこと起こってくれよ。」

淡い期待は強い願いに変わっていた。

再び階段を駆け上り、家と家の間を通りぬけ、普段は絶対に通らないような道を猫のように通っていった。長く急な坂道を上りきると、そこには駅前の騒がしさからは想像もつかないほど、静かな草原が広がっていた。この町にはしょっちゅう来ているが、こんなところがあるとは全く知らなかった。

赤い何かは、草原の中にぽつんと一つだけ建っている小さな家の前に、ひらひらと静かに落ちた。近づいてみると、それは一枚の短冊だった。そういえばもうすぐ七夕だったな、と思い出す。まあそこまで期待していたわけではないが、正直がっかりだった。

他人の願い事を見るのはどうなのだろうと少し思ったが、拾い上げてみると、幼い子供の字で、丁寧に名前まで添えてこう書かれていた。

「早く退院できますように。さおり」

あまり見ず知らずの人に同情するタイプではないが、このまま放置しては、なんとなくもやもやした気分が残る気がした。ポケットに入れて立ち上がり、引き返そうとしたとき、笹の木が視界の端に見えた。この広い草原の中にぽつんと一軒だけ建っている小さな家の中に、小さな笹の木があるのが目に入ったのだ。窓をのぞくとどうやらここは喫茶店らしい。一瞬ためらったが、これでもやもやした気分を残さずに済むのならと思い、喫茶店のドアを押し開けると、ベルの音がからんと鳴った。

中に人は見当たらなかった。

「すみません。どなたかいらっしゃいますか。」

返事はない。小物が雑然と置かれていて、その中に小さな笹の木が置かれていた。すでに一枚短冊が飾り付けられている。窓から差し込む光がそれにあたって、きらきら輝いている。それに見とれていると、後ろでベルがからんと鳴った。

「あ、いらっしゃい。」

と言って優しくなおじいさんが現れた。

「勝手にお邪魔してすみません。」

「いえいえ、こちらこそ席をはずしてすみません。」

おじいさんはカウンターの向こう側に座った。

「何か飲まれますか？」

「いえ、結構です。お気遣いなく。」

「面白い方だ。喫茶店の店主にお気遣いなくとは。」

そういえばここは喫茶店だった。

「では、何かお願い事があって来られたんですね。」

「お願い事？」

「違うんですか？」

「いや。」

確かに今このポケットの中に入っているのは、自分のものではないとはいえ、誰かの願い事であり、それに自分が少なからず何かを期待してここに来たことは確かだ。なんだか心を見透かされたような気がして気味が悪かった。

「この店は七月の一日から七夕までの一週間しかやっていないんです。」

それを聞いて納得した。七夕限定の店とは珍しい。

「だからあなたも何か願い事があるのかと。」

「実はですね。この近くでこれを拾いまして。」

これを追いかけてここまで来たとはちょっと言えない。

「なんだかそのまま放置するのは申し訳ないと思ひまして。」

「そういうことでしたら、ぜひこの笹に飾らせてください。」

「こちらこそお願いします。これですっきりしました。」

おじいさんは赤い短冊を笹の木に飾り付けた。

「『早く退院できますように』ってことは病院から飛んできたんですかね。」

「そうですね。この近くに病院はないので、結構遠くから飛んできたのかもしれませんが。」

「叶えてあげたいですね。」

「それなら心配ありません。」

「どうしてですか。」

「うちの笹の木に飾り付けた願い事は絶対に叶うんです。」

そんなわけないだろ、と言いきりそうになるのを寸前でこらえた。

「そんなわけないだろ。」

「えっ。」

自分の心を読まれたのかと思い、思わず驚きの声が出てしまった。

「さっき来た小学生に言われました。」

まあ言われてもしょうがないとは思う。俺もなかなか変な大人だとは思うけど、そんなことを本気で言っている大人は変わってると思う。

「信じられないでしょうけど、本当なんですよ。」

ちょっと悲しそうな表情をしたおじいさんを見て、少し申し訳なくなったが、フォローの言葉も思いつかなかった。

少し間をおいておじいさんは言った。

「ところで、笹の木に飾り付けた願い事は、七夕の日に届くのか、七夕より前に届くのかどっちだと思います？」

「どっちでしょうね。」

しかし本当に楽しそうに話すおじいさんを見ていると、こんな風に夢のある大人になりたかったなとか思ってしまう。子供には俺みたいな大人じゃなくて、このおじいさんみたいな大人になってほしいなとも思う。そのくらい目の前のおじいさんにうらやましさを感じていた。

「七夕の日に願いが届くんだとちょっと困るんですね。」

「どうしてですか？」

「さっき小学生が書いていった願い事なんですけど。」

最初から飾り付けられていた短冊だ。そこには「七月七日に雨が降りますように。」と書かれていた。

「雨が降ったら、願い事が届かないかもしれないなと思って。」

「大丈夫ですよ。願いが届いてから雨が降るんですから。」

「あ、そうか。そうでした。よかったよかった。」

それから長い沈黙が続いた。少しずつ沈んでいく太陽と、夕日に染まる街を、窓越しに眺めていた。

ふと気が付くと、だいぶ日も傾いていて、外はだいぶ薄暗くなっていた。時計を見ると、もうすぐ七時になろうとしていた。そろそろ帰ろうと、立ち上がると後ろから声をかけられた。

「あなたも一枚どうですか？」

おじいさんはそう言って、短冊を一枚差し出してきた。どうしようかと迷ったが、せっかくだから書かせてもらうことにした。しかし近頃、そんなこと考えたこともなかったから、何を願っているのかわからない。将来の夢を語れる年じゃないし、かといって夢のないことは書きたくないとも思う。でも夢のあることってなんだろう、と考えても皆目見当がつかない。

よく考えたら自分は小学生の頃から夢のない子供だったことを思い出した。小2の頃に学校で書かされた七夕の短冊にも、「安定した職に就きたい」とか夢のかけらもないことを書いた覚えがある。そのせいでこのおじいさんのように思うままに夢を語れる人に、あこがれのようなものがあるのかもしれない。それでも、自分には似合わないとか、夢ばかり語ってもしょうがないとか、言い訳できとうに作って、いつも逃げてきたんだな、とこのおじいさんを見ていたら気付かされてしまった。やはりここで一步踏み出すべきだろうか。もしかしたらこれはいつまでも変わらうとしない俺に神がチャンスを与えてくれたのかもしれない。そんなことを自分に語りかけてみる。それでも頭の中の自分は「そんなわけないだろ」と言って俺の頭を支配し始める。

「ゆっくり考えて下さいね。時間はたっぷりありますから。」

おじいさんは、俺の手がなかなか動かないのを見て、微笑みながら言った。

夢のありそうなことをいくら考えても、頭の中の俺にどんどん否定されていく。

「宝くじ当たりますように。」

「当たるわけない。変な夢見ない方がいいよ。」

「昇進したい。」

「俺には無理。そもそも出世とかあんまり考えたことないし。」

「幸せになりたい。」

「アバウトだな。だいたい今幸せじゃないわけ？ どういうところが幸せじゃないか言ってみな。言えないでしょ。そもそもどうなったら幸せだって言えるの？ わかんないでしょ。だったらそんなこと考えるより、今の生活がどれだけ幸せか考える方が大事じゃない？」

自分の向上心のなさにあきれてしまう。でも俺が考えてることも間違っていない。そうやって結局頭の中の自分を肯定してしまうのだ。

「ところでお仕事は何されているんですか？」

「えっ？」

「お仕事は？」

「えっと、公務員です。」

刑事って言うのはなんとなく避けたかった。

「あ、そういえば。」

そこで俺は気付いた。自分が刑事であることに気付いて初めて、今自分が一番望んでいることを

思い出した。どうして今まで思い出せなかったのか不思議なくらい強く望んでいることだ。もはや悩む必要はなかった。その願いを短冊に書き殴り、おじいさんに手渡した。見ると外はもう真っ暗だったので、おじいさんにお礼を言って、席を立った。

「また来てもいいですか？」

「もちろんです。」

ドアを開けると、ベルがからんと鳴った。

なんであんなこと書いたんだろう。今になって後悔し始めた。冷静に考えれば、あんなこと七夕の日にお願いする奴いるはずがない。放火犯ぐらい自分で捕まえろって誰だって思うだろう。きっと織姫も彦星も自分の仕事くらい自分でやれって怒るだろう。織姫と彦星を怒らせたらどうなるんだろう。やっぱり願いは叶えられないのだろうか。それどころじゃないかもしれない。叶うものも叶わなくなるかもしれない。

自然とため息が出る。しかしそこで、はっと気づいた。今俺は願いが叶うこと前提で考えている。だいたい夢のあることを考えられるようになったのかもしれない。ポジティブに考えることにした。

「ねえ、聞いている？」

「えっ？」

「さっきからぼーっとしてるけど。」

「あ、ごめん。」

さっきから息子の愚痴をずっと聞かされている。どうやら今度の遠足が相当気に入らないらしい。こいつの性格は確実に俺に似たな、と最近つくづく思う。

「だからさ、みんなで行くってところが嫌なんだよね。」

「みんなと行くから意味があるんじゃないのか。」

「先生もそうってたけど、みんなで行く意味ないと思うんだよね。だって百八人もいるんだよ。正直邪魔だと思うんだよね。先生も大変だろうしさ。」

どこかで聞いたことあるセリフだと思ったら、小四の頃の俺のセリフにとっても似ていた。

「それにさ、みんなに合わせてたら景色とかゆっくり見れないじゃん。それじゃあ山登って帰ってくるようなもんじゃん。」

「お前さ、そんな夢のないこと言うなよ。」

「じゃあ、夢のあることって何？」

「たとえばさ、なんか山の上で願い事をしたら、空に届くかもとか。七夕だし。」

よくこんな恥ずかしいことが言えたなと自分でもびっくりした。これもあのおじいさんの影響かもしれない。

「そんなわけないだろ。」

心の中では息子に同意していた。

「七夕の話はもう聞き飽きたよ。」

返す言葉が出てこなかった。このまま話を続けていたら、すぐに息子に賛同してしまいそうだからだ。息子には俺のようにはなってもらいたくないのだ。

その時、妻は何気なく言った。

「そろそろ寝たら？」

本当に妻は素晴らしいタイミングで素晴らしいことを言ってくれるなと思った。

しかし息子がこれほどまで俺に似ているとは知らなかった。どこまでも現実的で、夢なんか生まれてこの方見たことありません、みたいな顔している。もちろん夢ばかり見ている食っていけるほど甘くはないだろうし、夢なんかなくたってそれで幸せならそれでいいとも思う。今までそうやって生きてきたわけだし、後悔なんてしたこともなかった。というか、しちゃいけないと思っていた。でもどうしてか、今日はもやもやしてすっきりしない。たぶん今俺は、生まれて初め

て自分の生き方を疑っているのだと思う。初めて自分の生き方を見つめ直して、そして初めて子供の将来に不安を感じている。

「そろそろ寝たら？明日遠足なんだから。」

「あ、そっか。明日遠足だった。」

「あれだけ嫌がってたのに、忘れてたの？」

「いや、ちょっと現実逃避してただけ。」

「あ、そう。」

「じゃあ明日の準備したら寝るわ。」

「さっきやってなかったっけ？」

「一時間くらい前からずっと、遠足は急ぎよなくなったって言う設定で行動してたから、たぶん準備したものの全部片付けちゃったんだと思う。」

「お前そんなに行きたくないのか。」

「行きたくないよ。だってさ——。」

また愚痴が始まった。よくまあこんなにも嫌なところばかり思いつくものだ。これほどまでとは思わなかった。俺でもここまでではなかったと思う。

でもやっぱり心配になる。小学校のころは俺も結構親に心配されていた。逆にいえば、親がちゃんと心配してくれたから、いま俺はまともに生活していられるのかもしれない。だったら俺もちゃんと息子のことをちゃんと心配してやらなくてはいけないのかもしれない。ちゃんと注意してやらなければいけないのかもしれない。でも俺にそんなことを言う資格があるのか？そんな疑問が浮かんできた。生まれてこの方、夢のない人生を歩んできた。拳句の果てに、それを後悔してしまっている。そんな俺に息子を否定する資格があるのだろうか？

「ねえ聞ってる？」

「え、ああ。聞ってる聞ってる。」

「絶対嘘だね。どうせ僕の悩みなんてどうでもいいって思ってるんでしょ。」

「そんなわけないだろ。」

「だったらなんかアドバイスちょうだいよ。」

「アドバイス？」

「だから、遠足を楽しむにはどうすればいい？」

「そうだな……。」

その時、電話の音が鳴った。あわててケータイを探す。

「そこ。」

「えっ？」

「リモコンの横。」

「ああ、ありがとう。」

電話に出ると、聞こえてきたのは部下の声だった。ひどく焦った様子だ。

「今すぐ来てください。」

「どうしたんだ？」

「現在、〇〇町で火の手が上がっています。」

「放火か？」

「おそらく。」

「わかった。すぐ行く。」

電話を切ると、ジャケットだけ羽織って、急いで外へ出た。外はいつの間にか雨が降っていた。

「雨？さっきまであんなにいい天気だったのに。」

雨は結構強くなっていたが、傘も差さずに現場へ急行した。

現場へ向かっている途中、結局何もアドバイスできなかったことがずっと気がかりではあったが、後悔などしている場合ではなかった。息子に対して申し訳ない気持ちを押し殺して、雨の中を走っていった。

現場に着いた時には、ほとんど鎮火していた。おそらく今回は発見が早かったことと、先ほど降り出した雨のおかげで、被害が最小限に抑えられたようだ。

「ご苦労様です。」

「状況は？」

「今回は発見が早かったことと、先ほど降り出した雨のおかげで、被害が最小限に抑えられたみたいですね。」

「なるほど。それなら証拠がまだ燃え尽きていない可能性が高い。雨で洗い流される前に回収するよう頼む。」

証拠が見つければ逮捕できる可能性が格段に上がる。このチャンスを逃すわけにはいかない。

「ところで被害者は？」

「あちらにいるご夫婦ですね。彼ら自身は外出中で無事だったようなんですが、家に大事なものがあつたらしく、ひどく取り乱されているみたいですね。」

「わかった。持ち場に戻ってくれ。」

とりあえず被害者に話を聞きに行くことにした。被害者の夫婦はひどく泣き崩れていた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃありません。あの中には。」

「何があるんですか？」

「お金です。娘の手術費用なんです。」

慰めの言葉すらかけてあげることができなかった。今自分にできることは、お金が燃えずに残っていることを、彼らと一緒に祈ることだけだ。俺は彼らに一つ礼をして、その場を離れた。

翌朝、現場から見つかった指紋が決め手となり、連続放火事件の犯人の逮捕に成功した。鎮火が早かったこともあり、被害者夫婦の金は無事だったらしい。これで上司からの評価が下がることもない。きっとこの雨で息子の遠足も中止になっただろう。すべてが丸く収まりそうだ。

「そういえば、あの店、今日が最後か。」

なんだかんだ言っても、事件が解決したのは、あの店のおかげかもしれないから、帰り道に寄って行くことにした。

ドアを押し開けると、ベルがからんと鳴った。

「すみません。やってますか？」

「あ、いらっしゃい。あなたでしたか。」

「また来てしまいました。」

「何か飲まれますか？」

「コーヒーをお願いします。」

以前と全く変わらないこの雰囲気、とても落ち着かせてくれる。

「今日はお礼を言わせていただきたくて。」

「どうしてですか？」

「おかげさまで連続放火事件の犯人を逮捕することができました。」

「それはよかったですね。でも、お礼を言う相手を間違えていますよ。お礼は空の星に言っていたかかないと。」

「そうでしたね。」

あいかわらず変わったおじいさんだ。

「でも本当に叶うなんて驚きましたよ。」

「だから言ったでしょ。絶対に叶うって。」

この人が言うと本当に何でも叶う気がしてしまうから不思議だ。

「そうでしたね。」

その時、後ろから、からんというベルの音がした。それと同時に一人の少年が現れて言った。

「おじいさん、ほんとに雨降った。」

俺は声のする方をふりかえった。目の前にいたのは、ここ最近で一番の笑顔をした息子だった。驚きと同時に、俺はこの喫茶店に感謝した。こんな夢のような現実を見せてくれたことを。ほんの少しかもしれないけど、これで息子は変わるかもしれない。

あれ以来、俺は散歩にはまった。一か月がたった今でも、あの感動を忘れられずにいるのだ。特に何も無い日は、理由もなく電車に乗って出かけたりしている。今日は買い物かてら、隣町まで散歩をしている。

病院の前を通りかかったとき、見覚えのある顔に出くわした。その人は、小さな女の子を連れて病院から出てくるところだった。俺はその人に歩み寄り、話しかけた。

「こんにちは。」

「ああ、この間はどうも。」

「あのあとは大丈夫でしたか？」

「はい、おかげさまで。」

彼は最後の放火事件の被害者だ。連れてくる女の子は彼の娘だろう。

「あのお金で手術を受けることができて、やっと今日退院したんですよ。」

「本当によかったですね。」

あの雨がなかったら、この子は手術を受けることができなかったかもしれないということか。

「そういえば、まだ名前を聞いてませんでした。お名前はなんて言うんですか？」

女の子は少しためらいながら小さな声で言った。

「さおり。」